家庭の同行13
～ひき出されてゆく生きる力～

くだかけ会代表
和田重良

○穴のあきそうな心を「充たしてくれる」もの
○つないだ手は離さないと「信じている」こと
○あそこに帰れば迎えてくれると「あんしんできる」こと

あそび方を伝える

家庭での明るくやわらかい雰囲気を創り出しているものと言えばやっぱり何と言っても「あそび」です。

子どもがいるから「あそび」がある、とも言えます。

大人ばかりの家庭だと「あそび」の種類も質も違ってしまいますからね。それでも「あそび」は心の原点ですからどんな場面でも「あそび」は大切にしたいものです。

（人生にとっての「あそび」について20ページにありますので参考にして下さい）

「あそぶ」ことと能力

子ども時代の「あそび」はその後の人格形成に大きな影響があるのは明らかです。と言うことは「あそび」と能力や欲望の満足とは密接な関係にあるということです。

だと言うのに若い親たちは「あそび」って何だったんだろうとは思わずに「○○教室」などに通わすことに夢中になったり、中には知的な早期教育に目が行ってしまったりするのです。「あそび」の中にある心の自由さはどこかへ行ってしまい、最も大切な問題解決力はどこかへ行ってしまいます。言われたことしかできない、例の「指示待ち人間」になってしまいます。

親が「あそび」の鍵を握っていることは言うまでもありません。子どもの年齢と能力によって「あそび」の質はどんどん変わっていくものですから、能力の進歩に従って見守って行かなければならないのです。

「くだかけ」に来る子たちの中にも、幼児期から中学生や高校生になるまでほとんどその年齢に相応しい「あそび」をして来なかった子がいます。

そういう子たちが「その子らしい」自分を取り戻して来る時というのは絶対に百パーセント「あそび」を取り戻しているのです。

「あそび」から作る「自分」

例えば何人かの集団で「あそぶ」時、幼児が自然発生的にやるのは「ままごと」などの「ゴッコあそび」です。

これは、実はものすごく大切な「自己形成」の基本です。それをしないで「○○教室」なんかで目に見える能力を追いかけて「やらせる。あそばせる」としてしまうと基本が形成されないのです。

「自己形成」がされない子たちは思春期に不都合が起きるワケです。

そこで、ぼくらは「ままごと」のような「生活」から復活してもらうわけです。

先日もある高校年齢の子が「オニゴッコ」を喜んでやっていました。幼稚だね…と言うワケではありません。「自己形成」のやり直しをしているのです。

「あそび」の重要さは子どもの「自己形成」だけに限らず、おとなにも「心の健康」に大きな意味があるのです。

子どもの「あそび」には工夫がつきません。種類もたくさんあります。遊具を使ったものもあれば、自然の中でできるものもあるし、家の中でできるものもあるし、スポーツの元になっているようなものもあります。

ぼくが好きなのは「クイズ」や「しりとり」です。どこだって、いつだって「あそび」は創り出せるのです。

刺激はできるだけ少なく

「あそび」の原形は五感を動員していろいろな能力の刺激になるので楽しさや心や体が充実していく「実感」があるのです。

知徳体のバランスよい育ちの基本がほどよい刺激になります。

ところが、最近の家庭の生活の変化は子ども達にとって過剰な刺激が増えています。それもバランスの悪い刺激です。どこがバランスを崩すのかと言うと五感を総動員しないで、視覚と指先しか使わないのです。

親が注意しなければならないポイントが、昔は「悪いことしないように」だったものが今では「ゲームやパソコン、ケータイ」などにハマってしまわないようにするのには？という所になってしまいました。

こういう類の遊び道具は、要するに刺激的で面白いわけですから、できる限り小さいうちは遠避けておく工夫が必要です。

「みんな持っているのだから」とか「やらせておけば静かでいい、手がかからない」という理由で無分別に与えてしまうのです。

大人だってセルフコントロールのできない人がいるのですから、小さい子にセルフコントロールを求めるのは無理なのです。

「欲しがったから」という理由で子ども に与えてしまったパソコン……それでどうにもならなくなってしまっている人もたくさんいるのです。「まだ早い」の判断は親がしなければならなかったのです。

ほんとの「学び」は「あそび」と一体

露木和男先生の「自然観察会」や諸々の「実験」にあって、「ゲーム」や「教材屋の教材」などに無いものは何かと言うと、たぶん「こころの自由さ」や「解放されていく知」だろうと思うのです。

ほんとうの「学び」は「あそび」の延長上にあるか、一つだということです。そういう意味で親が「あそび」を知っていることは生活の内容の豊かさに直結していくのです。

和田重正言葉抄

視野をひろげる

人々の生活は物の豊かさに反してなんとセセコマシクなっていることでしょう。身のまわりの小っぽけな指得にばかり心を奪われていてはどんなに焦っても幸せは遠のいて行くばかりです。自分だけ、わが家だけ、わが校だけ、わが国だけがうまくやってみても全体のバランスを無視して やったことはもう一枠 大きいところで見ると絶対にまずいことになっています。第一その態度では敵を作ります。敵から撃ち返されてくるものはわが身にとっては必ずマイナスだからです。それは少し長い時間の中でみれば誰にでも明かなことでしょう。それほどわかり切ったことを忘れて、狭い視野と短い時間の中だけで結果を考え、人々は損を稼ぐために毎日コセコセと苦しんでいるのではありませんか。子どもたちの生活は小中高とか学生とか学期などと時間的にもこまかく仕切られているのです。それを親や教師が焦る気になる必ずは無理もありません。しかしそれでは却って子どもを不幸の方へ押やる努力をしているようなものの不幸。

新学期を機会に親御さんも先生方も従来の狭い視野と短い時間の枠を外して子どもたちの生活を見てやってほしいと思います。

（昭和56年くだかけ二十一号より）

一口メモ

「人生」とは壮大な「あそび」だと言う人もあります。「ままごと」のできる人がくだかけの理想形でもあるのです。

大切にしたいものです。